編集後記

今号でも三浦國雄先生から玉稿をいただくことができ、たいへん光栄に感じている。「墓室から洞天へ――死から再生への巡礼」は、洞天思想の成立を墓室に託された思想との類似性から解明しようとする論で、非常に啓発的である。また、三浦先生が批判的に依ってたつ姜生氏の研究『漢帝国的遺産：漢鬼考』に対する読者の積極的な読解も導いている。

雷聞氏の論文は、新出土の『景龍観威儀田僨墓誌』の検討である。この墓誌の情報は、2018年の東方学者会議で雷聞氏が来日した際にうかがい、2019年5月に科研費で来日を招請して研究発表していただいた。出土文献によって道教史研究が大きく進む実例だ。

廣瀬直記氏の論は、2019年6月に福建省寧徳市で開催された第1回洞天福地の研究と保護に関する国際学術会議での口頭発表にもとづいている。茅山における洞天思想の成立について、新鮮な議論を提示している。同じ廣瀬氏による「茅君内伝」の訳注研究は、やはり茅山における洞天思想の成立を解明するための基礎作業である。今後、連載していきたい。

寧徳での会議の様子は、酒井規史「首届洞天福地研究与保護国際学術検討会」参加報告記および同氏訳の「李豊楙教授の学術総括講演全文」および土屋訳の「洞天福地に関する蕉城の専門家建議」を参照していただきたい。この会議は、洞天福地を世界文化遺産に申請するための研究を多角的におこなおうとする学術実践であり、本科研の研究会の活動が中国側にも影響していると私は自認している。

辻拓朗氏の報告は、2019年9月に本研究でおこなった天台山に対する現地調査に合流し、そのあと私の紹介で括蒼洞天を探索した内容である。辻氏は法政大学探検部の現役で、ひごろから未発見の鍾乳洞を探索する活動をしている。山岳における道士の修行に関心があり、洞天研究の調査に同行することになった。天台山の調査報告は、本来であれば私がまとめるべきだが、それは次号で、歴史考証を主としておこなう考えである。

末筆ながら、出版が遅れたことにお詫びを申し上げるとともに、ご協力いただいた方々に感謝の意を表します。制作には古賀弘幸氏にご協力いただきました。感謝いたします。

（MT）